



自己領域化現象

国語科のK先生がご入院だったため、ご担当の慶応・文学部の小論文をピンチヒッターで受け持った。ここ数年は、医学部志望者の小論文をみたり、慶応だったら経済学部の小論文を見ることが多かったので、文学部は久しぶりであるが、添削をしていたら面白い課題文に出会ったので紹介しよう。(平成25、芹沢俊介『家族という意志』より)

*

このところ状況はさらに変化し、自己本位主義的志向という視点だけでは十分把握しきれない現実が、出現してきたように思えるのだ。

とりあげたいのは携帯電話の登場という問題である。携帯電話は、自己本位主義的志向が極めて強度をおびた社会状況と呼応したアイテムであることは誰でもが認めるに違いない。しかし、携帯電話の出現というできごとの象徴性を、記述するためには、自己本位主義的志向だけではもはや十分ではなく、もう一つ「個人化」という概念を必要としているようなのである。

理由の第一は、機器の特性として共用をこばむということ、一人ひとり個々が所有するという意味で、また機能が個々の暮らしや交遊や興味などと密接に結びついていることである。

理由の第二は、機器と個々の存在の同一性が不可分な関係に入ったことである。携帯電話なくしては自己存在の同一性を保ち得ないと感じている、それくらい依存度を高めている人たちが大量に出現してきているのである。一人ひとりが、自分の所持する携帯電話と一体化しているのである。

携帯電話が使用状態に入った途端、その使用者はあたかも見えない皮膜に一人包まれたかのように、自己の世界を閉鎖し、そこに没入する

のである。こうした個人化状況を自己領域化現象と名づけてみた。すると、車内という社会空間が、いくつも出現した自己領域によって複数に分割された姿がイメージ可能になってきたのである。ここから、社会空間のアノミー化（無秩序・無規制）と社会空間の自己領域化による分割とは、個人化の表裏一体の現象であるという理解が導き出される。

機器の進化によってもたらされた静けさに満ちた車内は一見、秩序だっており、その意味で個々は社会化されているようにみえる。だが、この状景は自己領域化の深まりが作り出したものであって、社会化、秩序化とは似て非なるものなのである。そう考えるのは、自己領域化の深まりが、自分の周りの他者のニード（必要）への静かな無関心という形で広がっているように思えてならないからである。

（電車で）下は制服姿の小学生の子どもたちから上は中年のサラリーマンまで、我先に空席の確保を目指す人が増えているように感じる。

私が興味深く思うのは、こうした小サブバイブルゲームの勝者が次にとる姿勢である。一度席を得ると彼らはすぐに自分の携帯通信機器を手にとり、それに没入しはじめるのである。そうになると、自分の前に足元の確かでない老人が立とうと、妊婦が立とうと、障害者が立とうとといった反応を示さなくなる。むろん席をつめようとしなければ、譲ろうとする気配もない。目前の人間がどういう状況にあるかを知ってはおかつ無関心を装っているのではない。携帯電話という自己領域世界に入り込み、その世界に没入しているため、周囲に生じている他者のニードに無関心な状態になっているのである。